The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代語のソ系列 : 観念指示の検討を中心に
Author(s)	藤本, 真理子
Citation	詞林. 2013, 54, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67658
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古代語のソ系列
――観念指示の検討を中心に――

藤本　真理子

一　はじめに

藤本（二〇〇八）では、中古語のソ系列を中心に、文脈指示用法と直示用法の関係について、文脈指示の用法から「そこ」のような場所指示の形式を通して、ソ系列の直示の用法が獲得されたことを述べた。しかし、次のような上代の例は、その二つの用法だけでは説明できないことが知られている。

（1）　a．にほ鳥の葛飾早稲を贄すともそのかなしきを［曾能可奈之伎乎］外に立てめやも（（にほ鳥の）葛飾早稲の稲を神に供える時であっても、あのいとしい人を家の外に立たせなどするものか。）（萬葉集、巻第一四、3386）

b．かくばかり恋ひむものそと知らませばその夜はゆたに［其夜者由多尓］あらましものを（こんなにも恋しくなると知っていたら、あの夜はもっとゆったりと過ごしたものを。）（萬葉集、巻第一二、2867）

（1）は先行文脈に指示対象がなく、また、今目に見える対象を指示しているわけでもないため、文脈指示の用法、直示用法のいずれにも当てはまらない用法と考えられる。堀口（一九七九）は、このような例のうち、例えば（1a）について「自分の観念に浮かんだ愛人を、平静におだやかに指示するもの」として説明し、この用法を観念指示用法と名付けている。また、金水・岡崎・曺（二〇〇二）では、「直示でも照応でもなく、かつ固定的な指示対象を持つと思われる（略）眼前にはないが話し手がよく知っている対象を先行詞無しに指し示すというもので、あえて現代語に置き換えるならば、「あの」「あれ」等のア系列で表現されるようなもの」として説明され、記憶指示用法とも呼んでいる。さらに、同じく金水・岡崎・曺（二〇〇二）では、このような用法が上代には多数確認できるものの、中古以降、ソ系列から次第に失われていくことが指摘されている。[1]

本稿では、（1）に挙げた例のように、指示対象が眼前に知覚できるものでなく、また先行文脈にも存しない場合の指示詞の用法をひとまず観念指示の用法としておく。ただし上代には、現代語の慣用表現（2）に残されている（3）のよ

うな例も見られるが、これらの例は、固定的な指示対象を持たず、曖昧な対象を指示するものとして、今回の考察では除いて考える。

（2）a．そこ〳〵の値段、しかじかの事、そこはかとなく、どこそこ、どれそれ等（岡崎二〇〇二：七八（12））

b．（久しぶりに会った人に）その節はお世話になりました。[2]

（3）明けゆく空は、いといたうかすみて、山の鳥ども、そこはかとなう囀りあひたり。（源氏物語、若紫、①219頁）

そのため、観念指示用法は次のように捉えておく。

（4）**観念指示用法**：

今、直接知覚できず、先行詞にもない、かつ固定的な対象を指し示す用法。

本稿で問題とするのは、上代から中古にかけての観念指示用法のあり方である。上代において、先行研究でも認められてきたソ系列の観念指示用法の例はどのような性質のものであるか、また中古までに、この用法は失われていくとされるが、そもそもこの用法が認められるのかについて論じる。

古典語は内省がきかないため、次節でまず、ある程度の枠組みを、現代語の指示詞において観念指示用法をもつとされるア系列を通して検討し、三節、四節では上代、中古のソ系列観念指示用法について考察し、五節でまとめと今後の課題を述べる。

二　現代語の観念指示用法

現代日本語では、ア系列の指示詞に、観念指示用法があるとされる。現代語のソ系列とア系列の違いは、これまでの先行研究から、以下のようにまとめられる。

（5）ア系列は言語的先行詞が必要ではないのに対し、ソ系列は直示の場合を除き、原則的に言語的先行詞を必要とする。

このことを確かめるには、次の（6）～（8）のような例が適当である。[3]

（6）（状況：一人の刑事が犯人を追って、あるアパードの部屋の前に来る。タイミングを見て一気に踏み込むが、そこには犯人は見当たらず、単に男達がマージャンをしている。刑事は、この男達が犯人をかくまっているに違いないと思って叫ぶ。）

刑事：〔あいつ／#そいつ〕はどこだ!?

（7）（状況：昨日、陽子は正男に手作りのケーキをあげた。陽子は、正男の反応が気になるので、電話をかけて、開口一番に聞く。）

陽子：ねえねえ、〔あれ／#それ〕、食べた？

（8）（状況：昨日面会に来た学生の名前が思い出せない教授が秘書に内線電話をかけ尋ねる。）

教授：昨日来た〔あの／#その〕学生、名前　何だった？

（6）～（8）に挙げた例文では、ソ系列は必ずしも非文ではない。状況を変えて先行詞を示すと、例えば(7)であれば、次のように適切な文となる。

（7）正男：この前、高校生からチョコレートもらっちゃったよ。

（陽子は、そのチョコレートを見ていない。）

陽子：ねえねえ、〔それ／#あれ〕食べた？

（5）に示した整理と上記の例から、言語的先行詞の有無がソ系列とア系列の違いであり、文脈指示用法と観念指示用法の認定に結びつくことが分かる。ア系列の指示対象は現場にもなく、先行文脈によっても導入されていない。もちろん先行文脈に指示対象を表すものがあってもよいが、ア系列の場合、それが必須ではない。一方、現代語のソ系列の文脈照応用法においては、先行詞が必要とされることは確認できる。では、上代のソ系列は、観念指示を含め、どのように用いられていたのか。

三　上代

三・一　ソ系列

上代には、（9）のような遠称の指示詞カ（ア）系列の例はほとんど見られない。ただし、これは調査対象の資料が韻文という資料の制約もあるため、上代において遠称の指示詞が未発達であったとすることはできない。

（9）a．かの児ろと［可能古呂等］寝ずやなりなむはだすすき宇良野の山に月片寄るも（萬葉集、巻第一四、3565）

b．沖辺より満ち来る潮のいや増しに我が思ふ君がみ船かもかれ［弥不根可母加礼］（萬葉集、巻第一八、4045）

資料的制約はありながら、ソ系列は一定の量確認できる。

（10）かくばかり恋ひむものそと知ませばその夜はゆたに［其夜者由多尓］あらましものを（萬葉集、巻第一二、2867、（1b）再掲、訳省略）

ソ系列は、（10）のような現代語でのア系列にあたるような例に加え、現代語と同じく、（11）のような文脈指示用法を中心的用法にもつ。（11a）は先行詞、（11b）は先行文脈からの推論によって導き出された対象と照応関係にあると見ることができる。

（11）a．しきたへの枕は人に言問ふやその枕には［其枕］苔生しにたり（萬葉集、巻第一一、2516）

b．ほととぎすこよ鳴き渡れ灯火を月夜になぞへその影も見む［曾能可気母見牟］（萬葉集、巻第一八、4054）

（12）a．周防にある磐国山を越えむ日は手向けよくせよ荒しその道［荒其道］（萬葉集、巻第四、567）

b．雁がねは使ひに来むと騒くらむ秋風寒みその川の上に［曾乃可波能倍尓］（萬葉集、巻第一七、3953）

また、先の（3）で見たような固定的な指示対象を持たず、指示対象が曖昧な例も確認できる。

（13）a．……印南つま　辛荷の島の　島の間ゆ　我家を見れば　青山の　そこども見えず［曾許十方不レ見］白雲も　千重になり来ぬ……（萬葉集、巻第六、942）

b．逢はむ日をその日と知らず［其日等之良受］常闇にいづれの日まで我恋ひ居らむ（萬葉集、巻第一五、3742）

三・二　指示対象との結びつき

本節では、上代のソ系列がどのような指示を行っていたかを明らかにするために、『萬葉集』におけるソ系列と指示対象との結びつきについて調査した結果を示す。この調査では、ソノＮＰのＮＰにくる対象をいくつかのカテゴリーに分けて整理している。表１はソ系列、表２はコ系列の結果である。

表１　萬葉集におけるソノＮＰ

人間	（人・児など）	13
	身体（顔・声・姿など）	5
	名	5
時間	日	7
	夜（夕）	7
	間	1
場所	山	9
	川	7
	道・宿など	5
	位置関係	2
もの	物	7
	色	1
	自然（花・月など）	10
天気	（雨・雪）	3

表２　萬葉集におけるコノＮＰ

人間	（人・児など）	3
	身体（魂・心・言）	3
時間	日・時・年など	12
	夜（夕）	16
	ころ	43
場所	山（野・柴など）	27
	川（津など）	17
	道・戸など	12
もの	物	6
	自然	12
天気	（雨・雪など）	3

※表１は萬葉集全巻、表２は萬葉集１～３巻の結果である。

「この」上位語

一人称代名詞	あたし・私	18
	おれ	39
	僕	9
人間	人	22
	こ（子・娘）	13
時間	この頃	20
	時	12
	夜（よ、よる）	15
場所	まち	106
	河	5
	海	9
	場所	9
	店	7
	部屋	19
	道	17
	空	5
	国	6
	世	62
身体	胸	113
	指	12
	手	61
	身	19
	頬	4
	命	8
	目	6
	腕	16
感情	心	13
	気持ち	13
	幸せ	11
	想い	10
	愛	35
	恋	22
状況	このまま	171

「その」上位語

時間	とき（時、瞬間）	42
	あと	11
	たび	5
	その後	18
	前	17
	日	48
場所	場	9
	中	8
感情	愛	6
	その気	31
表情	笑顔	6
	微笑	8
	涙	5
身体	手	32
	胸	19
	瞳	15
	め（目、瞳）	11
	腕	7
	顔	6
	姿	5
	指	5
名	名	11
状況	そのまま	41

「あの」上位語

人間	こ（子、女、娘）	219
	ひと（女、女性、人）	215
時間	日	173
	頃	116
	時	47
	夏	32
	夜（よる、よ）	30
その他	星	14
	歌	9

「あのうたこのうた3333」より（金水（二〇〇五）の調査による）

表1、表2に対し、参考として現代語の様相を「あの歌この歌3333」により示した。両者は、用法の別に関係なく「～ノNP」の形をとるものについて整理している。見比べてみると、上代語のソ系列においては、人間に関する語句をNPにとる例が多いことが分かる。また、「夜」という語についても上代語のソ系列ではある程度確認できる。しかしながら、これらの調査からは積極的な差異は認められないが、いずれのカテゴリーにも大きく偏ることはないことが分かる。

四　中古

四・一　ソノNP

中古語のソノNP、カノNPの分布については、清田（二〇〇八）の地の文に関する調査によると、ソ系列は時間表現に、カ系列は有情物に多いという結果を見せており、ソ系列は「概念的・抽象的な対象」、カ系列は「実態的・物理的な対象」を指向している様子が指摘されている。

三・二節表1で示した上代の様相と比較すると、全体数が異なるため一概には言えないが、上代のソノNPには（14）のように「有情物」に続く例も一定数見られ、必ずしも中古のように時間表現が多いとは言えないようである。

（14）a．胸別の　広き我妹　腰細の　すがる娘子の　その姿の［其姿之］　きらきらしきに　花の如　笑みて立てれば　玉桙の　道行く人は　己が行く　道は行かずて　呼ばなくに　門に至りぬ（萬葉集、巻第九、1738）

b．和射美の峰行き過ぎて降る雪の厭ひもなしと申せその児に［白其児尓］（萬葉集、巻第一〇、2348）

c．思ふらむその人なれや［其人有哉］ぬばたまの夜ごとに君が夢にし見ゆる（萬葉集、巻第一一、2569）

d．にほ鳥の葛飾早稲を贄すともそのかなしきを［曾能可奈之伎乎］外に立てめやも（萬葉集、巻第一四、3386、（1a）再掲、訳省略）

e．多胡の嶺に寄せ綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔良きに［曾能可抱与吉尓］（萬葉集、巻第一四、3411）

しかし、このような例は、NPが「有情物」であるからといって、一概に現代語の観念指示にあたるものとは言えず、文脈指示か観念指示かどちらとも判定できないものも多い。

四・二　ソ系列は非依存的といえるか

さて、上代から中古にかけての指示詞の体系変化について、金水・岡崎・曹（二〇〇二）では、次のように捉えられている。

（15）上代

	可視的	不可視的
非依存的	コ、カ	ソ
依存的	—	ソ、シ

（16）平安時代

	可視的	不可視的
非依存的	コ、カ、ア（ソ）	カ、ア（ソ）
依存的	—	ソ

本稿でいうところの観念指示用法は、指示対象が〔不可視的・非依存的〕なものにあたり、文脈指示用法は、〔不可視的・依存的〕にあたる。

金水・岡﨑・曺（二〇〇二）では、次のような例から、上代語のソ系列に先行詞を持たない、（4）で述べた観念指示用法があったと考えられている。

（17）a．にほ鳥の葛飾早稲を贄すともそのかなしきを［曾能可奈之伎乎］外に立てめやも（（にほ鳥の）葛飾早稲の稲を神に供える時であっても、あのいとしい人を家の外に立たせなどするものか。）（萬葉集、巻第一四、3386、（1a）再掲）

b．かくばかり恋ひむものそと知ませばその夜はゆたに［其夜者由多尓］あらましものを（こんなにも恋しくなると知っていたら、あの夜はもっとゆったりと過ごしたものを。）（萬葉集、巻第一二、2867、（1b）再掲）

現代語でア系列の指示詞が先行文脈の有無に左右されないことを鑑みると、上代のソ系列においても、この（17）の例や（18）、（19）は、文脈指示、観念指示とどちらの用法であるか判断のつかない例と言える。

（18）a．名児の海を朝漕ぎ来れば海中に鹿子そ鳴くなるあはれその水手［何怜其水手］（萬葉集、巻第七、1417）

b．ほととぎすなかる国にも行きてしかその鳴く声［其鳴音乎］を聞けば苦しも（萬葉集、巻第八、1467）

c．秋山をゆめ人かくな忘れにしそのもみち葉の［其黄葉乃］思ほゆらくに（萬葉集、巻第一〇、2184）

（19）a．富士の嶺に降り置きし雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり［其夜布里家利］（萬葉集、巻第三、320）

b．ぬばたまのその夜の梅を［其夜乃梅乎］た忘れて折らず来にけり思ひしものを（萬葉集、巻第三、392）

なぜなら、文脈指示で指示すると考えられる先行詞というものは広く、（11）のように「しきたへの枕――その枕」といった明示的先行詞もあれば、（12）のように必ずしも先行詞が明示的ではなく、先行文脈からの推論によって導き出されるものも含まれるからである。

（20）小麦粉と卵と牛乳をボールに入れてかきまぜてください。それをフライパンに注ぎます。

（20）は非明示的な先行詞を指示している。この例では、「小麦粉と卵と牛乳をボールに入れてかきまぜた、もの」が指示対象となる。このように考えた場合、使用された状況の推論

は非常に幅があるものとなる。これらの点も踏まえると、非依存的なソ系列、すなわち上代の観念指示と見ることのできるソ系列の例は、文脈を指す用法と区別するのが難しいと言わざるを得ない。

四・三　ソ系列のいわゆる観念指示用法

次に、中古の例からもソ系列の観念指示の用法について検討しておく。(21) は中古における、ソ系列の観念指示用法と見られる例である。

(21)　a．〔源氏・心内〕かうあらぬさまにもてひがめて、恐ろしげなる気色を見すれど、なかなかしるく見つけたまひて、我と知りてことさらにするなりけりとをこになりぬ。その人なめりと見たまふに、いとをかしければ、……（源氏、紅葉賀、①343頁）

b．（扇を取り交わした相手を探して歌を詠む）「心いる方ならませばゆみはりのつきなき空に迷はましやは」といふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。（源氏、花宴、①366頁）

これらの例の他に、(22) のような「そのかみ」「その昔」といった定形化した表現で非依存的と見える例が存する。

(22)　〔左馬頭〕「〔それまでに自分の女で、異常なほど嫉妬深いという癖をもった女がいた話を延々している。〕そのかみ思ひはべりしやう、かうあながちに従ひ怖ぢたる人なめり、……」（源氏、帚木、①72頁）

これらも先行文脈からの推論による指示と捉えることも可能な例である。「様々な文脈が述べられ、そこから推定される人物といえば……あの人だ！」といったような文において用いられることが多い。同時期における (23) のようなカ（ア）系列の観念指示用法とは、この時点で既に違いがあるようにも見られる。

(23)　a．［かぐや姫から蓬莱の玉を手に入れるよう命を受けた後］皇子ののたまはく、「命を捨ててかの玉の枝持ちて来たるとて、かぐや姫に見せたてまつりたまへ」といへば、……（竹取物語、29頁）

b．（よく知りもしない女を寂れた場所に連れていって、死なせてしまった後）「かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。」（源氏、夕顔、①168頁）

(23b) では、直前の文脈において、「尼君」については触れられておらず、ソ系列のような広い意味での先行文脈からの推論とは言えない例である。またNPにくる対象もソ系列のように定形化しておらず、中古のカ（ア）系列の指示は広い範囲での使用を見せている。

五　まとめ

本稿では、ソ系列の上代・中古での観念指示と呼ばれる用法について、それらの例がどのようなものかを検討し、中古

でのカ（ア）系列の指示との違いを指摘した。

最後に、ソ系列全体の指示の中でこれら観念指示と呼ばれるものがどのように位置づけられるかを見ておく。ソ系列の指示のメカニズムについては、同じく古代語を中心に考察した藤本（二〇一三）で次のように規定した。

（24）ソ系列の指示

〔先行する言語表現の記述的意味が〕

Ⅰ．ある場合―引き継いで指示

Ⅱ．ない場合―空欄のまま

Ⅰの場合、文脈照応用法となる。Ⅱの場合は、「その日の気分」のような指示対象の固定しない曖昧指示となる。ここに加えて聞き手領域指示は、上代、現場における対象との結びつきが一切なかったソ系列が、聞き手という存在と結びつくようになって成立したと考えられる。この中で観念指示と見られた用法は、Ⅰ、Ⅱにまたがるものとも言える。

古代語の指示においては、今、直接知覚できるか否かが優先的に作用した。しかし、中古に入って現れたア系列は、話し手から遠い（近くない）ものを指示せよというメカニズムで働き、その対象が物理的か心理的かまたは時間的か、すなわち直接知覚できるか否かを問わないものであった。そのため、心理的に遠い、時間的に遠い対象に関しては直接知覚できないという側面に焦点をあてるか、対象が近くないという側面に焦点をあてるかによって、指示詞の選択に違いが生じていたと考えられる。ソ系列とカ（ア）系列が重なりあって、観念指示の用法を持つように見えるのは、このためである。

今後の課題として、中古・中世と時代が下っていく中で、ソ系列とカ（ア）系列双方の指示対象のカテゴリーについてさらに調査を進め、これらの類似点、相違点を実証的に示していきたい。

注

（1）堀口（一九七九）は「古代語と現代語とにおける指示体系に根本的な相違はない」と述べており、ソ系列の観念指示用法は現代語にも存するという考えのため、金水・岡崎・曺（二〇〇二）とは立場を異にする。

（2）これと類似した例について、金水（一九九九）は、ア系列を用いた表現にすると、特定の場面を指示していることになる点、また、「その節」という表現の定形性があることから、ソ系列の古い特徴を残す表現として現存しているのではないかと述べている。

（3）例文は、上山（二〇〇〇）より引用。#はそれが付いた文が単独では非文法的、認容度が低いとはいえないが、問題となる文脈を考慮すると不自然であることを表すとされている。

調査資料

『萬葉集』（新日本古典文学大系）

『竹取物語』『源氏物語』（以上、新編日本古典文学全集）

参考文献

井手至（一九五二）「萬葉の指示語」『萬葉』、第五號、四九～五七頁、萬葉学會
上山あゆみ（二〇〇〇）「日本語から見える「文法」の姿」『日本語学』、一九‐五、一六九～一八一頁
岡﨑友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に」『国語学』、五三‐三、一～一七頁、国語学会
岡﨑友子（二〇〇六）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について―ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考―」『日本語の研究』、二‐二、七七～九二頁、日本語学会
岡崎友子（二〇一〇）『日本語指示詞の歴史的研究』、ひつじ書房
清田朗裕（二〇〇八）「『源氏物語』の地の文にみえるカ系列指示詞について―カノN・ソノNの対照から―」『国語国文研究と教育』、四六、一三～二七頁、熊本大学教育学部国文学会
金水敏（一九九九）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』、六‐四、六七～九一頁、自然言語処理学会
金水敏・岡崎友子・曹美庚（二〇〇二）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究―日本語・韓国語・トルコ語」生越直樹編『シリーズ言語科学4　対照言語学』、二一七～二四七頁、東京大学出版会
金水敏・田窪行則（一九九二）『指示詞』日本語研究資料集【第1期第7巻】、ひつじ書房
田窪行則（二〇〇八）「日本語指示詞の意味論と統語論―研究史的概説―」『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』語学教育フォーラム第一六号、三一一～三三七頁、三省堂
藤本真理子（二〇〇八）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』、第九〇輯、四〇～五三頁、大阪大学国語国文学会
藤本真理子（二〇一三）「仮想現実の設定とソ系列指示詞―古代日本語を中心に―」『甲南女子大学研究紀要』、文学・文化編、第四九号、一～八頁、甲南女子大学
堀口和吉（一九七九）「「その愛しきを外に立てめやも」考」『山邊道』、二三、一～一二頁、天理大学国語国文学会

付記・本稿は第三回蛍池言語研究会、於蛍池公民館（平成一七年二月一七日）での口頭発表に基づく。

（ふじもと・まりこ　本学特任研究員）